

RepressorとSensitizerの面接時アイ・コンタクトと言語的応答ならびに視覚刺激に対する走査行動⁽¹⁾

Eye Contacts and Verbal Responses during Interviews and the Visual Scanning in Repressors and Sensitizers

竹田 真理子

TAKEDA Mariko

(和歌山大学教育学部心理学教室)

坪倉 佳澄⁽²⁾

TSUBOKURA Kasumi

(和歌山県立医科大学小児成育支援室)

松山 武彦⁽³⁾

MATSUYAMA Takehiko

(九度山町教育委員会)

2007年10月12日受理

Abstract

Eye contacts and verbal responses of repressors and sensitizers were examined. In Experiment I eleven repressors and sixteen sensitizers, abstracted from 169 undergraduates, were participated to twice interviews where emotional questions and neutral one were inquired. The verbal response time, the duration of verbal answer and eye contact were analyzed. Mean eye-contact duration of the repressors was significantly longer than that of the sensitizers. In Experiment II cruel, sexual and neutral still pictures were presented. Eye movements during the observation of them were recorded. Four repressors, four sensitizers and four middle scorers were participated. In the results the repressors looked at significant part more frequently than the sensitizers. These results of the two experiments suggest that sensitizers do not defend themselves by looking at stressful stimulus.

key words: Repression-Sensitization次元、アイ・コンタクト、視覚的走査、眼球運動、知覚的防衛

はじめに

主に知覚的防衛の研究から概念化されたRepression-Sensitization次元(以下R-S次元)は一次元的連続体であり、その両極では不安喚起刺激に対する防衛反応に差異があるとされる。すなわち、repressionの極では、抑圧、否認などの防衛機制が含まれ、不安覚醒刺激に対する防衛反応として回避反応を示し、一方、sensitizationの極では、知性化などの防衛機制が含まれ、不安覚醒刺激に対しては接近反応を示す。Repressionの極に位置する者はrepressor、sensitizationの極に位置する者はsensitizerと呼ばれる。

R-S次元を測定する尺度として、Byrne(1961)は、MMPIの尺度を組み合わせて、156項目からなるRepression-Sensitization Scale(R-S尺度)を作成した。さらにその後、Byrne, Barry, & Nelson(1963)は項目分析を行って、127項目からなる改訂版R-S尺度を作成した。わが国でも、戸苺(1964)が、Byrne(1961)のR-S尺度を基に、項目分析を行って、防衛行動の研究の第一段階としての30項目からなる尺度を作成した。また、竹田・松山(1983)もMMPIの日

本版からByrne et al.(1963)によるR-S尺度改訂版に相当する127項目を1150名に実施、その得点分布などを明らかにした。

不安の言語化に関して、repressorは言語連想における混乱を示しやすく、不安の言語化を避ける(回避反応)のに対し、sensitizerは逆に不安を言語化することで低減しようとする(接近反応)と考えられている。相馬(1978)は、言語連想検査に、不安覚醒刺激として外傷語と中性刺激として非外傷語を用い、言語化された不安の得点(MAS)と、連想反応時間、GSRを測定した。その結果、不安の言語化得点においてはsensitizerの方が高く、連想反応時間はrepressorの方が遅く、GSRはrepressorの方が大きな反応を示し、sensitizerの方がGSRの慣れが不良であることが示された。

アイ・コンタクトは、面接者という視覚的な刺激に対する「見る」接近行動としての面を持つと考えられるが、生身の人間ではない脅威的な視覚刺激に対する「見る」反応についても、R-S次元はもともと知覚的防衛から出てきた概念だけにいくつかの研究がなされている。このような研究の中でHaley(1974)は脅威

(1)本研究の実験IIは、竹田(1988)の「2」の部分を加筆修正したものである。

(2)和歌山大学教育学部平成12年卒業。

(3)和歌山大学教育学部昭和58年卒業。

刺激に対する眼球運動行動を調べ、repressorはsensitizerに比べてストレスの強いフィルムの有意味な内容からの回避を多く示したことを報告している。しかし、Haley(1974)の分析は、正面にあるストレスの強いフィルムから目をそらしたかどうか、また視野の中心からの偏りという指標によっており、刺激内の脅威度の空間的な分布について十分配慮されたものではなく、結果についてもrepressorとsensitizerの違いは限定的なものに過ぎない。そこで本研究の実験IIでは、脅威的な視覚刺激に対するrepressorとsensitizerの視覚走査行動を、刺激内の情緒性の空間的分布との関係でみることにした。また、脅威刺激の内容についても、Haley(1974)の用いた産業事故のフィルムのような残酷な内容のものだけでなく、性的な内容のものについても検討する。

実験 I

実験 I では、初対面の人との面接場面における対人行動、とりわけアイ・コンタクト、言語的応答、対人距離を、repressorとsensitizerについて検討することを目的とした。仮説は以下の通りである。[仮説1]質問に対する回答までの潜時はrepressorの方がsensitizerより長いであろう。[仮説2]Repressorはsensitizerに比べて、あまり多くを語らない(回答所要時間が短い)であろう。[仮説3]Repressorは、sensitizerに比べてアイ・コンタクト量が少ないであろう。[仮説4]面接者との距離は、repressorの方がsensitizerより遠くを好むであろう。[仮説5]これらrepressorとsensitizerの差異は、不安を生起させるような情緒的質問時の方が不安をあまり生起させない中立的質問時に比べて顕著であろう。

方法

研究参加者 大学生169名(男77名、女99名)にR-S尺度を実施、男女別に高得点者と低得点者各10名、計

表1 実験 I における実験参加者のR-S得点分布

	人数	平均	標準偏差	得点範囲
Repressor群	11	14.9	7.02	5~24
Sensitizer群	16	78.6	6.65	69~91

表2 質問内容

情緒的質問	中立的質問
1. 心をひどく傷つけられた経験について	1. 休日の過ごし方について
2. 情緒的に未熟だと思われる点について	2. 最近気になる芸能界やスポーツのニュースについて
3. 嫉妬した経験について	3. 趣味について
4. 孤独感や疎外感を感じた経験について	4. 最近気になるニュースについて

40名をそれぞれSensitizer、Repressorとした。R-S尺度は、日本版MMPI(三京房)改訂版からByrne(1963)の改訂尺度に相当する127項目を抜き出したものであった。実際に実験参加者となったのは、そのうちの27名(Repressor群:男8名、女3名の計11名、Sensitizer群:男7名、女9名の16名)であった。表1に実験I参加者の内訳を示す。過去の研究(竹田・松山, 1983)のR-S得点の分布から見て、これらの参加者をそれぞれsensitizer、repressorと見なしてさしつかえないと考えられる。

手続き 面接を2回実施した。実験参加者と面識のない21歳の女性2名のうち1名が面接者(2回とも同一面接者)であった。1回目面接では、予めビデオカメラがセットされた面接室に参加者が招き入れられた。ビデオカメラは参加者からは見えないようにセットされたが実験後確かめたところによれば、数名が気がついていて参加者の着席する椅子は面接者から120cmの位置に固定されていた。面接者は参加者の回答を記録する時以外は参加者に視線を向けていた。各参加者への質問は中立的質問と情緒的質問各2問の計4問で、表2に示した内容を具体的に話させた。参加者には1問につき3つずつ答えるように、また、どうしても答えたくない時や思い出せない時は無理に答えなくてもよいことを教示した。2回目面接は同じ面接室で行われたが、参加者の着席する椅子は参加者に移動させた。質問は1回目の面接とは異なる情緒的質問と中立的質問各2問であった。1回目と2回目の質問内容は、参加者間でカウンターバランスが取られた。参加者退室後、椅子間の距離が測定された。

結果と考察

各参加者の言語的応答について、反応潜時(面接者が質問をし終わってから参加者が答え出すまでの時間)、回答所要時間(参加者が最初の回答を言い始めてから言い終わるまでの時間)、回答数、アイ・コンタクトに関してはアイ・コンタクト量(参加者が面接者を見た時間の総量)、アイ・コンタクト回数(参加者が面接者を見た回数)を2回の面接を撮影したビデオから測定した。それに加えて、椅子の距離、2回目面接での椅子の距離を1回目の距離から引いたもの(椅子の距離差)も算出した。一部欠損したデータは、各指標内で欠損していない場合は当該指標においては分析に用いた。

反応潜時: 表3に2回の面接における2種の質問

表3 平均反応潜時(sec)

	1回目面接		2回目面接	
	情緒的質問	中立的質問	情緒的質問	中立的質問
Repressor群	7.6(5.96)	9.0(10.87)	14.3(12.76)	6.0(5.76)
Sensitizer群	8.3(6.22)	5.9(5.60)	11.1(9.99)	7.0(7.46)

()内は標準偏差

に対する反応潜時を示す。性差は見られなかったため、分析は男女を合わせて行った。防衛型(R・S)を被験者間要因、質問内容(情緒的・中立的)を被験者内要因とする2×2の分散分析の結果、1回目面接、2回目面接とも、いずれの主効果、交互作用とも有意ではなかった。

回答所要時間： 1回目の面接における2種の質問各2問に対する所要時間を表4に示す。Sensitizer群の方がRepressor群より平均所要時間は長かったが、2問の平均値について、男女を合わせ、防衛型(R・S)を被験者間要因、質問内容(情緒的・中立的)を被験者内要因とする2×2の分散分析をおこなったところ、質問内容のみ主効果が有意($F=6.835, df=1, p<.05$)で、中立的質問に対する回答より情緒的質問に対する回答を述べる時間の方が長かったが、防衛型の主効果、交互作用は有意ではなかった。全体の印象としてはSensitizer群では教示の「できるだけ具体的に」という言葉を念頭に置いた回答が多く見られ、逆に、Repressor群では回答途中で「もう少し具体的に答えて下さい」と付け加えられる場面が比較的多かった。

情緒的質問に対する回答数： 各情緒的質問に対する回答数をみると、1問につき3つずつ答えるように教示を与えたが、同時に、無理に答えなくてもよいことも教示したので、回答数にはばらつきが見られ、1問以下しか答えなかった参加者も多くみられた。そこで、各情緒的質問に対する回答が1個以下だった者と2個以上だった者に分類したのが表5である。Repressor群の方がSensitizer群に比し、回答数が少ない。回答数の多少は、先の回答所要時間とも関連するが、repressorが不安の言語化を避ける(回避反応)ことに

表4 1回目面接における平均回答所要時間(sec)

	情緒的質問		中立的質問	
	1問目	2問目	1問目	2問目
Repressor群	44.4 (21.94)	37.7 (17.21)	25.8 (17.73)	39.2 (33.65)
Sensitizer群	88.6 (87.35)	48.2 (22.53)	32.3 (27.26)	42.0 (25.33)

()内は標準偏差

表5 情緒的質問に対する回答数

情緒的質問	回答数	0個または1個		2個または3個	
		人数	割合	人数	割合
情緒的質問1	Repressor群	10人	(91%)	1人	(9%)
	Sensitizer群	8人	(50%)	8人	(50%)
情緒的質問2	Repressor群	4人	(36%)	7人	(64%)
	Sensitizer群	0人	(0%)	16人	(100%)
情緒的質問3	Repressor群	6人	(55%)	5人	(45%)
	Sensitizer群	5人	(31%)	11人	(69%)
情緒的質問4	Repressor群	7人	(64%)	4人	(36%)
	Sensitizer群	2人	(12%)	14人	(88%)

質問の番号は、表2の質問内容に対応する

よって不安を低減しようとする防衛反応を示すのに対し、sensitizerは、不安を言語化する(接近反応)ことによって低減する防衛反応を示すという違いを示すものと考えられる。

アイ・コンタクト： アイ・コンタクト量を表6に示す。平均アイ・コンタクト量はRepressor群の方がSensitizer群より多く、また、情緒的質問の方が中立的質問より多かったが、2×2の分散分析の結果、1回目面接、2回目面接とも、有意なものはなかった。アイ・コンタクト回数を表7に示す。防衛型、質問内容を要因とする2×2の分散分析の結果、1回目面接、2回目面接とも、質問内容の主効果が有意で(1回目： $F=4.637, df=1, p<.05$ 、2回目： $F=9.908, df=1, p<.01$)、情緒的質問の方がアイ・コンタクト回数が多かった。アイ・コンタクトをどれだけ持続させているかという平均アイ・コンタクト持続時間(アイ・コンタクト量/アイ・コンタクト回数、ただしアイ・コンタクト量が0の場合は0とした)を表8に示す。平均アイ・コンタクト持続時間は、2回の面接ともRepressor群がSensitizer群より高い値を示し、2×2の分散分析の結果、1回目面接、2回目面接とも、防衛型の主効果が有意であった(1回目： $F=8.054, df=1, p<.05$ 、2回目： $F=4.673, df=1, p<.05$)。アイ・コンタクト率、すなわち、回答している間にどれだけ割合アイ・コンタクトを保っているかという割合(ア

表6 平均アイ・コンタクト量(sec)

	1回目面接		2回目面接	
	情緒的質問	中立的質問	情緒的質問	中立的質問
Repressor群	6.4(6.91)	3.3(3.53)	14.1(17.72)	5.6(8.27)
Sensitizer群	3.8(3.82)	1.7(2.00)	6.8(8.34)	3.0(3.17)

()内は標準偏差

表7 平均アイ・コンタクト回数

	1回目面接		2回目面接	
	情緒的質問	中立的質問	情緒的質問	中立的質問
Repressor群	3.7(3.16)	3.2(3.71)	6.8(5.86)	3.4(2.99)
Sensitizer群	5.3(5.68)	2.5(2.40)	8.1(7.32)	4.0(3.52)

()内は標準偏差

表8 平均アイ・コンタクト持続時間(sec)

	1回目面接		2回目面接	
	情緒的質問	中立的質問	情緒的質問	中立的質問
Repressor群	1.7	1.3	1.9	1.3
Sensitizer群	0.7	0.7	0.8	0.9

表9 椅子の距離差の平均(cm)

Repressor群	男	17.6
	女	13.0
Sensitizer群	男	15.3
	女	8.6

イ・コンタクト量/回答所要時間)は、1回目面接の情緒的質問でRepressor群平均16%、Sensitizer群6%、中立的質問でRepressor群平均10%、Sensitizer群5%と、Repressor群の方がSensitizer群より高い割合を示したが、U検定の結果、両群間の差は、どちらの質問においても有意ではなかった。

椅子の距離差：椅子の距離差を表9に示す。椅子の距離差の平均(cm)は、Sensitizer女、Repressor女、Sensitizer男、Repressor男という順で大きくなっていったが、男女別と群別にU検定を行ったところ、有意差はなかった。

本実験においては反応潜時、回答所要時間、アイ・コンタクト量、アイ・コンタクト回数のいずれの指標においてもRepressor群とSensitizer群の間に有意な差は見られず、sensitizerがアイ・コンタクトをよく保つとか、言語的応答において潜時が短い、回答時間が長い、あるいは対人距離が近いといった、顕在的な接近反応とみなしうるような対人行動は、予想に反して示されなかった。それどころか、平均アイ・コンタクト持続時間に示されるように、sensitizerの方がむしろアイ・コンタクトを保たない傾向が見られた。その理由としては、面接者は、どのような質問がされるにせよ、脅威的な不安喚起刺激の性格を荷っており、repressorは不安喚起刺激に対して、顕在的行動のレベルではあたかも不安刺激でないがごとき抑圧的防衛反応をとることが考えられよう。また、本実験の参加者数が少なかったこと、男女の数のアンバランス(ただし、面接者とは異性となる男性参加者の比はRepressor群の方が高かった)、刺激の不安喚起が強くなかった(総合的考察で後述)可能性なども考慮する必要がある。

実験 II

Repressorとsensitizerについて脅威的な内容を含む視覚刺激に対する視覚的走査を検討することを目的とした。

方法

研究参加者 実験 I とは異なる男子大学生292名にR-S尺度を実施、その中から高得点者と低得点者、中位に位置する者各4名、計12名をそれぞれSensitizer群、Repressor群、中間群とした。実施されたR-S尺度は実験 I と同様、日本版MMP I (三京房)改訂版からByrne(1963)の改訂尺度に相当する127項目を抜き出したものであった。表10に実験 II 参加者の内訳

表10 実験 II における実験参加者のR-S得点分布

	人数	平均	得点範囲
Repressor群	4	17.5	16~19
中間群	4	45.3	41~50
Sensitizer群	4	74.5	72~78

を示す。

装置と手続き 実験参加者には脅威的内容を含む写真と中立的内容の写真がスライドで提示され、自由に見ているときの眼球運動がナック社製アイマークレコーダIV型によりVTRに記録された。刺激の視角は、上方に約35 deg、下方に約12 deg、左右各45 degであった。なお、短大生68名を参加者とした予備調査により、刺激スライドはそれぞれ12分割された各部分について「気になる度合」が評定されるとともに、刺激全体について「恥ずかしさ」、「残酷さ」、「気持の高ぶり」が評定され、残酷刺激(暴行場面、交通事故)、性的刺激、中立的刺激各4枚が抽出され、実験の刺激とされた。

結果と考察

刺激提示開始後0-3秒、3-6秒、6-9秒、0-9秒の時間ブロックに分けて眼球運動を分析した。0-3秒ブロックと0-9秒ブロックにおける「気になる度合」最高評定値区画に対する停留回数を、それぞれ表11と表12に示す。防衛型(被験者間要因)と刺激(被験者内要因)を要因とする3x3の分散分析を各ブロックごとに行った。その結果、0-3秒ブロックで刺激の主効果が有意($F=9.33, df=2, p<.01$)、0-9秒ブロックで防衛型的主効果($F=5.69, df=2, p<.05$)と刺激の主効果($F=17.22, df=2, p<.01$)が有意であった。ここからsensitizerが他群に比べ

表11 0-3秒ブロックにおける最高評定値区画への平均停留回数

	中立刺激	性的刺激	残酷刺激
Repressor群	8.5	9.0	11.5
中間群	10.8	6.0	11.8
Sensitizer群	5.0	5.0	9.8

表12 0-9秒ブロックにおける最高評定値区画への平均停留回数

	中立刺激	性的刺激	残酷刺激
Repressor群	20.3	18.0	26.0
中間群	22.5	12.8	26.3
Sensitizer群	14.8	11.5	17.8

表13 0-3秒ブロックにおける評定値上位3区画への平均停留回数

	中立刺激	性的刺激	残酷刺激
Repressor群	14.8	19.0	17.0
中間群	19.0	17.8	18.8
Sensitizer群	13.0	12.0	15.3

表14 0-9秒ブロックにおける評定値上位3区画への平均停留回数

	中立刺激	性的刺激	残酷刺激
Repressor群	38.0	43.0	40.0
中間群	41.5	43.8	42.8
Sensitizer群	29.3	33.3	36.3

て「有意義な」部分をあまり見ないことが示唆される。なお、最高評定値区画への停留数比および停留時間には群間に有意差はなかった。また、ともに脅威刺激と考えられる残酷刺激と性的刺激であるが、防衛型にかかわらず、「有意義な」最高評定値区画への停留が残酷刺激は中立刺激より多いのに対し、性的刺激は同じくらいか、むしろ少ない。

次に評定値上位3区画に対する停留回数(0-3秒ブロックと0-9秒ブロック)を表13と表14に示す。3×3の分散分析の結果、0-3秒ブロックにおいて防衛型の主効果が有意($F=4.89$, $df=2$, $p<.05$)で、やはりSensitizer群の停留が少なかった。中立刺激においては群間に有意差はなかった。

本結果から、このような実験事態における眼球運動という点では、repressorが情緒刺激の有意義な部分を避けるという形の回避防衛を示すわけではないと考えられる。

総合的考察

「見る」という行動に関して、予想に反して、対人行動においても(実験I)、また、提示された視覚刺激に対しても(実験II)、不安を引き起こすと考えられる刺激に対して、sensitizerが接近的と考えられる、よく見るという防衛行動を、repressorが回避的と考えられるあまり見ない行動を示すわけではなく、どちらかと言えば、むしろ逆の傾向が示された。これは、言語的な反応(相馬, 1978; 相馬, 1980; 木村, 1983など)やGSR(相馬, 1978)等と異なり、「見る」という反応の特殊性からくるものかも知れない。すなわち、sensitizerの脅威刺激への接近という防衛行動の本質が、脅威刺激に対してsensitiveというところにあるのであれば、不安の表出として、不安の言語化と同様に、あまり見ないことは、考えられることであろうし、逆にrepressorが、不安の抑圧により、あたかも脅威刺激でないよ

うな顕在的行動(「見る」)を示すことも考えられよう。また、相馬(1980)によれば、不安喚起の強度が十分な場合はrepressorは回避反応としての反応抑制を示し、sensitizerは接近反応としての反応鋭敏化を示すが、不安喚起の強度が十分でない場合は逆の関係が示されるという。今回の実験が、不安喚起の強度が充分でなかった可能性も否定できない。

言語的な反応時間等についても、先行研究の結果も必ずしも一義的ではなく、まだ、R-S次元については、今後もデータ数を増やして、研究の積み重ねが必要であろう。

引用文献

- Byrne, D. 1961 The repression-sensitization scale: Rational, reliability and validity. *Journal of Personality*, **29**, 334-349.
- Byrne, D., Barry, J., and Nelson, D. 1963 Relation of the revised repression-sensitization scale to measures of self-description. *Psychological Reports*, **13**, 323-334.
- Haley, G. H. 1974 Eye movement responses of repressors and sensitizers to stressful film. *Journal of Research in Personality*, **8**, 88-94.
- 木村法子 1983 TATによるRepression-Sensitization次元の研究, *心理学研究*, **54**, 95-101.
- 相馬壽明 1978 Repression-Sensitization次元における防衛反応の差異—言語連想を中心に— *心理学研究*, **49**, 30-35.
- 相馬壽明 1980 Repression-Sensitization次元における防衛反応の差異—非言語反応と言語反応について— *心理学研究*, **51**, 113-119.
- 竹田眞理子・松山武彦 1983 Repression-Sensitization次元に関する検討 日本教育心理学会第25回総会発表論文集. 670-671.
- 竹田眞理子 1988 REPRESSION-SENSITIZATION次元について 堀内英雄教授追悼論集 和歌山大学心理学教室同窓会 Pp.83-91.
- 戸蒔正人 1964 防衛行動の研究—MMP Iによる防衛尺度の作成— *愛媛大学紀要 教育科学* **11**, 21-32.